

博士学位請求論文審査報告書

題 目 コリアンの国際移動とナショナリズム
近現代における「同胞」言説の系譜と再検討

Migration and Nationalism, The Case of Koreans :
A Reconsideration of the Modern Concept of 'Compatriot'

提出者 羅京洙（早稲田大学大学院アジア太平洋研究科, 4003s323-7）

1. 論文の概要

現在、およそ 682 万人のコリアンが全世界の 170 余の国家・地域で暮らしている。なぜこれほど多くのコリアンが、生まれ育った故国の生活共同体を離れて国際移動をし続けているのか、移動を通じて彼らのアイデンティティがどのように変容していったのかなど、さまざまな側面を持つ彼らの国際移動に大きな関心が寄せられている。

本博士学位請求論文は、国境を越えるコリアンの国際移動とナショナリズムとの関係性を考察したものである。すなわち、コリアンの越境がナショナリズムとどのように関わり合いながら展開されてきたのかを分析している。また本論文では、コリアンの国際移動を、個別的・無作為的なものではなく、歴史的な文脈の下で一定のパターンを帯びつつ展開された構造的なものであり、その「構造」の根底には国家と民族によるナショナリズムがあったことを明らかにしている。さらに、コリアンの国際移動とナショナリズムのこうした構造的関係を媒介する言説として、「同胞」という概念に着目し、越境するコリアンとナショナリズムの関係をより立体的に捉えようとする。近現代における越境コリアンは、時代が変わっても、「同胞」という言説で規定／表象され続けてきた。本論文では、近代においては「民族独立のため」、現代では「国家発展のため」という論理で、この「同胞」言説の連続性が保たれてきたという点を強調している。とりわけ従来の研究では看過されてきた、「国家発展のための同胞」言説の形成に主導的な役割を果たした韓国海外開発公社とその機関紙『海外開発報』の存在を明らかにし、これらをナショナリズムの観点から詳述している。これまでの先行研究はコリアンの国際移動をめぐる事象を時系列的に羅列するものが多く、その大部分の研究が「国史」と「民族史」という認識の枠内にとどまるという限界を露呈していることを指摘しつつ、本論文は従来“タブー”視されてきた「聖域」に触れることを試みるものでもある。

また上記の点とも関連するが、本論文のもう一つの特徴は、「個人」と「国家」を両軸とする新たな視点から、コリアンの国際移動を捉え直そうとすることである。これまで国家

のナショナリズムが当然のように作り上げてきた「同胞」という言説の論理によってコリアンの国際移動が規定され、移動する主体であるコリアン個々人もその「同胞」の一員になることをそのまま受け止めてきた。しかし、ナショナリズムによる「同胞」というこの言説はどのようなものであり、実体はあるのか、単に作り上げられた「虚像」ではないのか、という疑問を提示した。本論文では、移動するコリアンのアイデンティティを集団化させるこの「同胞」言説の本質を検討している。この作業によって、コリアンの国際移動の本質もより明確になると考えるからである。本論文は、これまで研究対象とされてこなかった「個人」の観点を新発掘の資料を基に実証し、ナショナリズムを前提とした従来の分析枠組みに対するオルタナティブを提示する試みでもある。

2．本論文の構成と概要

本論文の構成及び概要は以下のとおりである。

序 章 課題と方法

第1章 人の国際移動に関する理論的検討

第2章 コリアンの国際移動の歴史的背景

第3章 移動とナショナリズム：つくられた「同胞」の神話

第4章 移動とアイデンティティ：ゆれうごく「個人」の帰属性

第5章 移動とリージョナリズム：東アジアにおける人と文化の「域際性」

終 章 意義と展望

補) 在日一世とのインタビュー：ハルモニたちの声に学ぶ「個」の移動生活史

参考文献

各章の概要について述べておく。

まず序章では、問題意識、先行研究、構成と内容、研究方法、キー概念の説明を含む本研究の全体的な枠組みと視座に触れる。

第1章では、人間の国際移動に関する主な理論を再検討し、既存の理論によってコリアンの国際移動を捉えられるかどうかを考察している。とりわけ「移民論」と「ディアスポラ」という概念の限界を指摘する。従来の移民論だけでは、近年の人間の移動の展開と状況を説明できないという限界があり、人々の国境の越え方をより柔軟に理解できる「移動」という言葉の妥当性に着目している。「ディアスポラ」という概念についてはこれまで明確に定義されず、研究者の都合に合わせて使用されてきた点を指摘している。何らかの理由での迫害や追放による集団的・精神的トラウマを受けた民族集団が離散を余儀なくされるという意味合いが強いこの概念でコリアンの国際移動をひとくくりにしようとする動きを、

本章では批判的に捉えている。

第 2 章では、コリアンの国際移動に関する歴史的背景を辿り、近代から現代に至るまでの状況を日本、中国、ロシア（旧ソ連）、東南アジアなどへの移動を中心に概観している。すなわち、在日コリアン、中国朝鮮族、高麗人などの移動経験に内在する歴史的な特殊性と共通性を比較分析し、現代におけるコリアンの国際移動とどのように連続または断絶していくのかを明らかにしている。まず、近代における移動の歴史では、日本植民地支配によって朝鮮半島の人の流れが大きく方向づけられたことを強調する。ただし当時のコリアンの国際移動が日本の植民地支配による加害の結果であるという史実を告発するのではなく、本章では、被植民者として国境を越えた彼らの国際移動がどのようになされたかの究明に重点を置いている。次に、現代における移動の歴史では、南北分断と理念対立という構造の中で、韓国政府の政治・政策的判断によってコリアンの国際移動が大きく左右された側面を浮き彫りにしている。移動の連続性という観点から、こうした近代における国際移動の歴史は、現代におけるコリアン・マイグレーションに様々な形で引き継がれるようになったことが指摘される。

第 3 章では、国家と民族が作り出すナショナリズムによって、いかにコリアンの国際移動が影響されてきたのかを検証している。とりわけ「同胞」という言説がどのような形成過程を経て、彼らの意識の中に根強く残るようになったのかを考察している。本章では、この「同胞」という言説が偶然の所産ではなく、歴史的な連続性を持って形成されたものとして位置づけられる。日本植民地支配下では、民族主義に基づく「同胞」の言説が作り上げられた。当時、越境コリアンは、朝鮮独立という大義のために各自の思想と理念を超越し、「民族」という大きな枠組みの中で「同胞」としての同質感情を維持し続けた。現代においては、韓国政府の国策によって「同胞」言説が作られた。韓国政府による 1962 年の「海外移住法」、1965 年の財団法人韓国海外開発公社の設立の背景には、国際移動を志す「個人」に対する保護・支援というより、「国益」の論理が働く。このように、移動するコリアンに植え付けられた「同胞」意識は、近代における独立のための民族主義から、現代における国益のための国家主義へと継承されていく。

第 4 章では、個人レベルでのコリアンの国際移動に焦点をあてている。先行研究では欠落していた重要な諸事例を取り上げつつ、移動当事者である個々のコリアンがどのような背景で国際移動を決心したか、またその過程で彼らのアイデンティティはいかに変容したのかを実証的に跡付けている。その代表例として「柳泰慶」という朝鮮青年知識人を取り上げている。彼は、1922 年代初期東京で人類主義を掲げた『亜細亜公論』という雑誌を刊行し、国家と民族を超える思想運動を試みた。朝鮮、日本、中国、アメリカなどへ越境し続けながら、民族と人類と異なるベクトルをもった概念の間で苦悩する彼の生き方から、植民地出身のディアスポラ知識人の多面的なアイデンティティを描き出そうと試みている。次に、1910 年から 1924 年にかけてハワイへ渡ったコリアン「写真花嫁」の事例を取り上げている。その移動の歴史的背景と共に、男性と民族を中心に語られるコリアンの国際移

動史の中で、彼女たちは如何にして自己アイデンティティを確立していったのかを明らかにしている。また現代においては、1970 年代初に沖縄へ渡りパイナップル工場やサトウキビ農場で働いた季節労働者を取り上げる。彼らは、当時の韓国政府が国家発展のために推し進めた海外移住政策の対象となった。政策の対象者であると同時に移動の当事者である彼らがどのような思いで沖縄へ向かったのかを、当時の関係者とのインタビューに基づいて論じている。

第 5 章では、国際移動における人と文化の緊密な相互関係に着目しつつ、コリアンの近隣アジアへの国際移動に焦点をあてている。コリアンのダイナミックな域内移動が地域統合論とどのような関係を持ち、越境コリアンがアジアを「地域」として認識しているのかについて検討している。とくに「韓流」文化の域内での広がりをどう解釈すべきかを考察の射程に入れている。さらに本章では、域内で人と文化が活発に行き来する現象を「域際」という言葉で把握することを試みている。

終章においては、国家間の事柄に基づく従来の国際関係論とマイグレーション研究における本研究の学問的位置づけ、また、今後の展望と課題を述べた。移動するコリアンを規定してきた「同胞」という言説は、血統主義に基づく排他性のみを強調する狭義の意味ではなく、異質的な文化と民族を受け入れる寛容と普遍の概念として再解釈する必要があることが強調されている。

3 . 審査内容

本論文審査委員会は、提出された上記論文の口頭審査を 2009 年 12 月 10 日（木）午後 3 時 5 時にかけて実施した。上述したような、論文全体の着眼点の新鮮さ、豊富な一次資料の渉猟、オーラル・ヒストリーの手法の活用等多くの点で高い評価が寄せられた反面、論理的考証の詰めの甘さ、終章（5 章）と他の章との理論的関連性、やや飛躍的な表現等、改善すべきいくつかの問題点も指摘された。審査委員会による質疑、提出者の応答のうち主な点は以下のとおりである。

- （1）現代の韓国社会を見ると、コリアンの国際移動とナショナリズムが互いに関わり合いを持ちながらも、一方では、多くのコリアンが自由に国境を越えるという「国境の多孔化」(porous borders) 現象も同時に起きている。こうしたコリアンの国際移動に内在する一見相反する性格をどう理解するかとの問いに対して、越境コリアンには、国民国家のナショナリズムと深く関わる側面と、その国境を活発に越える側面を同時に持つという両面的な性格があるとの回答があった。
- （2）人の国際移動とナショナリズムを考える際、本論文では、海外に出て行くコリアンのみを研究対象としたが、韓国に移動・居住する外国人との比較分析も重要な研究課題ではないか、また韓国社会が「在外同胞」だけでなく、「在韓外国人」に対する

政策と態度も視野に入れる必要があるのではないかとの意見が出された。この点については、今日の韓国社会は、682 万の在外同胞と 100 万の在韓外国人、つまり、相矛盾する民族主義と多文化主義を同時に認識せざるを得ない「人流の新段階」に入っている。そのため、血統と排他の言説から普遍と寛容のものへと、「同胞」概念を再解釈することが求められている、との返答があった。(論文提出者はこの「同胞」言説の再解釈こそが、学問的にも、実践的にも韓国社会が真の意味での多文化社会を実現する上での鍵となるとの立場に立つものである)。

- (3) 本論文は 2 部編成となっているが、第 1 部の完成度が全体的に高いのに対し、第 2 部では、「発掘」、「文化的生命力」など、学位論文としてやや不適切な情緒的表現が散見されたが、これらの表現は書き手ではなく本論文の読み手が判断するものである、との指摘がなされた。また叙述方法との関連で、第 4 章第 2 節ではコリアン「写真花嫁」に関する英文の詩が最後に挿入されているが、これも節の終わり方としてはふさわしくないとの指摘があった。論文を 2 部編成にした理由については、第 1 部(「理論と歴史」と第 2 部(「現象と展開」)は相互補完的な関係に立っているとの説明があった。すなわち、第 1 部では、人の国際移動に関する理論的検討とコリアンの国際移動の歴史的背景を検討し、第 2 部では、これらの理論と歴史を背景知識とし、コリアンの国際移動とナショナリズムが実際にどのような関係性の中で展開されたかを考察したものであるとの見解が提示された。
- (4) 論理展開の一貫性について。論文のタイトル、とりわけ『『同胞』言説の系譜と再検討』というサブタイトルは非常に新鮮で魅力的である。また、「移動とナショナリズム」(第 3 章)「移動とアイデンティティ」(第 4 章)「移動とリージョナリズム」(第 5 章)など、各章のタイトルと構成そのものは良い。しかし、論文のテーマと各章の内容が必ずしも論理的に結ばれているとは言い難い面もある。たとえば、本論文の最も重要なキーワードである「同胞」言説が論文の後半部では十分に検証されていない。また越境コリアンのアイデンティティはナショナリズムの影響を強く受けてきたと主張される一方、他方では、彼らは多様で重層的な性格を持っているとの主張が並列されている。さらに全体的な論理の流れが滑らかでないのは、それぞれの章と節に小括を設けていないからではないか、章と節の導入部と後半部に適切なまとめを置くことによって、各章が緊密に結ばれ、論理展開の面においても統一感を与えることができるであろうとの指摘がなされた。
- (5) 第 5 章の位置づけに関し、本論文の主題がコリアンの国際移動とナショナリズムの関係性を対象としていることに比べ、この章では、東アジアに広がる韓流現象を論じており、その関連性が弱いとの指摘があった。これに対して、人と文化の国際移動は互いに密接な関係の中で展開しており、これを最もよく表現できる事例が韓流現象であるとの返答があった。(韓流文化が国境を越えて、東アジア地域の人々から幅広く受け入れられるという事象を強調するために本章を設けたというわけだが、

その点についてはより明確な形で関連付ける必要性が強く求められた。

- (6) 人の国際移動における「個人」の観点から捉え、そのなかで無名の朝鮮青年知識人・民族主義者柳泰慶を取り上げたことは、既存の研究には見られなかった点で高い評価に値する。柳泰慶は大正末期に東京で『亜細亜公論』という雑誌を刊行するなど、日本とは一定の関係を持っていたが、現代韓国において「親日派」と負の評価をされる可能性はあるのかとの質問に対しては、次のような回答があった。本論文脱稿後、韓国では、民間の民族問題研究所が『親日人名辞典』を、政府の親日反民族行為真相委員会が『親日反民族行為真相究明報告書』をそれぞれ発刊し、大きな波紋を呼んでいる。両資料には、日本の植民地統治行為に「協力」した「親日派」が網羅されている。この中には、国境を行き来した越境コリアンも多数含まれている。今後、柳泰慶にも「親日派」のレッテルが貼られる素地が全くないとは言い切れない。しかし、国境を越える個人の全生涯とアイデンティティをそう簡単に「評価」してよい性格のものであるのか。「そうでない」ということの裏付けとして、柳泰慶の場合は、越境コリアンに内在するトランスナショナルな側面とアイデンティティの重層性を確認できる良き事例研究である、との所見が述べられた。
- (7) 世界史的文脈で捉えた本論文の位置づけについて。コリアンの国際移動とナショナリズムの関係を繋ぐ重要な筋が「同胞」概念である。韓国政府が「在外同胞法」を制定してまで、国境を越えるコリアンに影響を及ぼすということは、国際社会の中でも極めて稀なケースである。その観点から、本研究はいかなる世界史（国際史）的意味を持つのかとの質問に対し、コリアンの国際移動は偶然的なものではなく、ナショナリズムに基づく歴史的連続性を帯びつつ展開されてきた。また、その根底には「同胞」という言説が厳として存在していた。近代における植民地的トラウマは、分断と冷戦に代表される現代の国家主義イデオロギーに繋がり、民族と国家への必要以上の強調と執着を招いた。ここで、「同胞」概念は、越境するコリアンの集団的アイデンティティを維持するために用いられた。そのために、国境を行き来して近現代を生き抜いてきた多様な主体（個人）と彼らの空間的移動に対する関心と研究が、従来の研究史において大幅に立ち遅れていた、との考察がなされた。
- (8) その他の論点として、序章では、これまで十分に検討されてこなかった人の国際移動に関する理論を批判的に考察し、現在の国際関係にふさわしい新たな国際移動論のモデルを摸索・提示すると言及されたが、既存の理論に関する検討はある程度なされたものの、国際移動論の新たなモデルの提示は十分になされていない、コリアンの国際移動の歴史的背景を検討した第 2 章では、在日コリアンに比べて、中国朝鮮族、在米韓人、高麗人などに関する言及の分量が相対的に少なかった。よく知られている在日コリアンよりは、その他の地域へ移動したコリアンをより詳しく知りたい。また、内容の分量との関連で、終章が多少短いとの指摘もなされた。終章では、すでに言及した内容であっても、改めて整理・主張する必要がある、補

足資料として論文の最後に配置した在日一世へのインタビュー資料は、その内容を分析し、越境コリアンのアイデンティティ問題を取り扱う第 4 章の本文に反映させるべきであった、第 4 章では、越境するコリアンの重層的アイデンティティを実証するために、何人かの在日青年とインタビューを実施しているが、個人のアイデンティティを学問的に分析するということはきわめて難しい、等々の意見があった。

4 . 審査結果

本論文審査委員会は、提出された学位請求論文の査読ならびにそれに基づく口頭審査の内容を慎重に審査した。その結果、今後本研究が完成度を高めるには上で指摘されたような諸問題が課題として残るものの、早稲田大学の博士学位を授与するに値する論文であることを全員一致で承認した。ただし、審査過程で提起された問題点のうち、技術的に修正が必要であり、かつそれが可能である箇所については手直しを施し、本委員会に改めて提出するよう求めたことを付記しておきたい。

本論文審査委員会の構成

指導教員 後藤乾一 早稲田大学大学院アジア太平洋研究科教授、博士（法学，慶應義塾大学）

副指導教員 平野健一郎 早稲田大学名誉教授 Ph.D(ハーバード大学、歴史学)

審査委員 山岡道男 早稲田大学大学院アジア太平洋研究科教授 博士（学術、早稲田大学）

審査委員 黒田一雄 早稲田大学大学院アジア太平洋研究科教授 Ph.D(コーネル大学、教育学)

2010 年 1 月 9 日